

三三二四番

かけまくも あやに恐し 藤原の 都しみみに 人はしも 満ちてあ
 れども 君はしも 多くいませど 行き向かふ 年の緒長く 仕へ来
 し 君が御門を 天のこと 仰ぎて見つつ 恐けど 思ひ頼みて い
 つしかも 日足らしまして 望月の たたはしけむと 我が思ふ
 皇子の命は 春されば 植槻が上の 遠つ人 松の下道ゆ 登らして
 国見遊ばし 九月の しぐれの秋は 大殿の 砌しみみに 露負ひて
 なびける萩を 玉だすき かけてしのはし み雪降る 冬の朝は 刺
 し柳 根張り梓を 大御手に 取らしたまひて 遊ばしし 我が大君
 を 煙立つ 春の日暮らし まそ鏡 見れど飽かねば 万代に かく
 しもがもと 大舟の 頼める時に 泣く我 目かも迷へる 大殿を
 振り放け見れば 白たへに 飾り奉りて うちひさす 宮の舎人も た
 へのほの 麻衣着れば 夢かも 現かもと 曇り夜の 迷へる間に
 あさもよし 城上の道ゆ つのさはふ 磐余を見つつ 神葬り 葬り奉
 れば 行く道の たづきを知らに 思へども 験をなみ 嘆けども
 奥かをなみ 大御袖 行き触れし松を 言問はぬ 木にはありとも あ
 らたまの 立つ月ごとに 天の原 振り放け見つつ 玉だすき かけ
 て憫はな 恐くありとも

反歌

三三二五番

つのさはふ 磐余の山に 白たへに かけられる雲は 皇子かも